

9月28日（月）ヘブル人への手紙5章4節

「また、この栄誉は自分で得るのではなく、アロンがそうであったように、神に召されて受けるのです。」

大祭司においてきわめて重要なことは、神により任命されたということです。自分で自分を任命したのでもなければ、誰か他の人によって任命されたのでもありません。そう考えますと、「この栄誉は自分で得るのではなく、アロンがそうであったように、神に召されて受けるのです。」とありますように、神は召して任命した者に栄誉を授けてくださり、召された人はそれを受けるのです。そして、この栄誉を受けることにおいて留意すべきことがあります。それは、召されて神から任命を受けた者たちが、その働きのゆえに神から栄誉を受けるのではないということです。つまり、主の召しをもって、牧師、教会の役員、C S教師などの働きに任命された者たちが教会にもいますが、仮に私も含めて一人ひとりが、人の目から見て、どんなにすばらしい働きをしたとしても、主の目から見て、その者たちの働きは主から栄誉を受けるには全く不十分です。つまり、誰かが主から栄誉を受けるのは、不十分な働きしかできないにもかかわらず、主が彼らに恵みとしての栄誉を授けられるからです。そして、主が私たちの働きにおいて目をとめられるのは、私たちがどんなことをしたかではなく、どれだけ召しに忠実であったかということであり、忠実な者は主から「よくやった。よい忠実なしもべ」と言われて称賛されるのです。

私たちも、主の御前に忠実に信仰生活を送り、忠実になすべきことを行うなら、私たちは主の栄誉を受けるに価する者とみなされますが、しかし、すべては主の恵みです。そのようにして、さまざまなかたちで私たちに恵みを注ぎ続けてくださる主に心から感謝をし、今日も主の御名を高らかにほめたたえましょう。そして、私たちは主から受ける栄誉を主にあって誇り、このような者を召して、栄誉を与えようとしてくださる主を誇りましょう。

9月29日（火）ヘブル人への手紙5章5節

「同様にキリストも、大祭司となる栄誉を自分で得たのではなく、「あなたはわたしの子。わたしが今日、あなたを生んだ。」と語りかけた方が、それをお与えになったのです。」

「同様に」とありますが、アロンと同様に、キリストも大祭司となる名誉を自分で得たのではありません。実際に神の御子であるイエスであれば、大祭司となる栄誉を自分で得ても良さそうなものですが、イエス様はそれを決して良しとはされず、父なる神から大祭司となる名誉を

受けたのです。さらに、イエスとは言わず、ここで「キリスト」の称号が用いられています。キリストとは、油注ぎという意味ですが、まさに父なる神の油注ぎをもって、イエス様は父なる神から大祭司の栄誉を受けたということです。まさに、ここにも御子イエス様の父なる神にお従いになる姿があり、イエス様の謙遜が現れていると言えます。

もう一つ疑問に思われることは、なぜ父なる神という表現を用いないで、「あなたはわたしの子。わたしが今日あなたを生んだ。」と語りかけた方という言い方をしているのだろうかということです。もちろん意味があつて、このような表現を用いているのですが、福音書を見ますと、バプテスマのヨハネからバプテスマを受けた時に、天からの声として引用されていて、(マタイ 3：17、マルコ 1：11、ルカ 3：22) イエス様の公生涯の始まりがこの詩篇 2 篇 7 節の引用により現わされています。そしてイエス様は十字架におかかりになり、苦しみ、血を流し、死なれましたが、三日目によみがえられることで、全人類の罪の贖いを完全に成し遂げられ、天に昇り、父なる神の右の座に着かれましたが、もろもろの天を通られ、神の子イエスという偉大な大祭司として、そこにおられるのです。すなわち、「あなたはわたしの子。わたしが今日あなたを生んだ。」と言われてイエス様を全人類の救い主とされた方が、今度は、そのイエス様に大祭司となる名誉を与えられたということです。

確かにイエス様に大祭司としての名誉が与えられたことを、みことばが明らかにしています。

9月30日(水) ヘブル人への手紙5章6節

「別の個所でも、「あなたは、メルキゼデクの例に倣い、とこしえに祭司である。」と言っておられるのです。」

メルキゼデクは、なぞの多い人物ですが、創世記 14 章 18～20 節とヘブル人への手紙 7 章 1～3 節にも出てまいります。創世記 14 章 1 節から見ますと、エラムの王ケドルラオメルと彼と連合した王たちが、ソドムとゴモラを打ち、アブラハムの甥のロトを捕らえて、連れ去ってしまいました。アブラハムは家の兵士たち 380 人を率いて、後を追ひ、彼らを打ち、甥のロトと奴隷、財産を取り戻しました。この時、サレムの王メルキゼデクが、パンとぶどう酒をもってアブラハムを迎えて祝福しました。そして、アブラハムは、取り戻した財産の十分の一をメルキゼデクに与えました。メルキゼデクとは、「義の王」「平和の王」という名です。彼はサレムの王でありながら、同時に、いと高き神の祭司でもありました。そして、このメルキゼデクについては、歴史上の人物でありながら、父も母もなく、系図もなく、生涯の始めも終わりもないという意味では、あたかも永遠の人物であるかのようです。

「あなたは、メルキゼデクの例に倣い、とこしえに祭司である」とは詩篇 110 篇 4 節の引用ですが、ここで言われていることはイエス様がとこしえの祭司であるということです。つまり、アロンのように死をもって代々大祭司の職が次の者たちへと継承されることなく、イエス様はとこしえに、いつまでも変わることなく、「私たちの大祭司」(4 章 15 節)としての務めを果たし続けてくださるのです。そして、このことは確かなこととして、みことばが証ししています。いつまでも変わることはない、とこしえの大祭司であるイエス様を見上げ、この方に信仰を置いて、私たちも信仰の歩みをともに歩んでまいりましょう。

10月1日(木) ヘブル人への手紙5章7節

「キリストは、肉体をもって生きている間、自分を死から救い出すことができる方に向かって、大きな叫び声と涙をもって祈りと願いをささげ、その敬虔のゆえに聞き入れられました。」

ヘブル人への手紙の著者は「キリストは、肉体をもって生きている間」と言うことで、人としてのキリストの生涯に目を向けさせようとしています。その中にあって、この手紙の著者が特筆したかったことは、イエスの祈りでした。「自分を死から救い出すことができる方に向かって、大きな叫び声と涙とをもって祈りと願いをささげ」とありますが、多くの人がこれはゲッセマネの園での祈りであることに賛同しています。「大きな叫び声と涙」は、ゲッセマネの園でのイエス様の血の汗を伴う苦悶に満ちた祈りの姿、苦悩と悲しみの激しさを表していますが、涙は本文中には出てまいりませんが、祈りの中で涙を流されたことは十分ありえることだったでしょう。それと同時に、ゲッセマネの園で突然イエス様が十字架におかかりになることについて祈ったわけではなく、「肉体をもって生きている間」イエス様は常に大きな叫び声と涙をもって、自分を死から救い出すことができる方に向かって、心を注ぎ出し、熱心に十字架への歩みについて祈っておられたことも十分考えられます。

「自分を死から救い出すことができる方に向かって」とありますが、イエス様は十字架で死なれたにもかかわらず、「自分を死から救い出すことができる方」とは、どういうことなのだろうかと疑問を持つ方もおられますが、これはイエス様が十字架で死なれた後、三日目によみがえられたことを言おうとしているのだろうと思われます。つまり、イエス様ご自身も、父なる神による死からのよみがえりを信じて、このお方に向かって祈りをささげたということです。そして「その敬虔のゆえに聞き入れられました。」とありますが、ある人々は間違っていると主張します。というのは、イエス様は死から救われず、十字架にかかれて死なれたので、死から救われなかったし、イエス様のこの祈りは聞かれなかったと言うわけです。しかしイエスは確か

に死なれましたが、死から救い出す方によって、死からよみがえらせられ、「それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名を与えられました。」(ピリピ人への手紙2章9節)これが、イエス様に対する祈りの答えであり、イエス様は確かに死から救われただけでなく、それ以上の栄光をも受けたのです。まさに「その敬虔のゆえに聞き入れられました」とあるとおりで、この場合の敬虔とは、イエス様が十字架の死をものともせず、父なる神様のみこころに謙遜に最後まで従い通したことを現していて、その敬虔さのゆえに、イエス様が死から救い出す方により、死から復活させられたのです。

10月2日(金) ヘブル人への手紙5章8節

「キリストは御子であられるのに、お受けになった様々な苦しみによって従順を学び」

「キリストは御子であられるのに」とありますように、キリストは神の御子であるにもかかわらず、なぜ従順を学ぶ必要があったのかという問題が出てまいります。確かにイエス様が完全な神の御子であることに着目すれば、従順を学ぶ必要はなかったかもしれません。しかし、私たちは「キリストは神の御子であられる方なのに」との言葉に注目すべきです。すなわち「キリストは御子であられるのに」まことの人となられたお方であって、まことの人となられたイエスには、従順を学ぶ必要があったのです。マタイの福音書4章1節～11節やルカの福音書4章1節～13節に、イエス様が悪魔の誘惑を受ける記事が出てまいります。このことも悪魔の誘惑を通して、神への従順を学ばれたのであり、昨日も書きましたが、ゲッセマネの園での祈りにおいて「しかし、わたしが望むようにではなく、あなたが望まれるままに、なさってください。」「わが父よ。わたしが飲まなければこの杯が過ぎ去らないのであれば、あなたのみこころがなりますように。」(マタイの福音書26章39, 42節)と祈られ、十字架への道を歩むことで、イエス様は従順を学ばれましたが、まことの人としてのイエス様の歩みは、苦難の中で従順を学び続けられた歩みと言えます。

私たちもイエス様の御跡をたどる歩みを続けていくなら、様々なかたちで従順を学ばされることとなります。しかし、それらはすべて父なる神様のみこころから出ていることであり、むしろ父なる神様は私たちに従順を常に学ばせようとされ、私たちが従順に歩むことを喜ばれるお方だということです。そして、私たちの信仰の従順は、周りへの信仰の証しとなり、それは私たちの品性を飾る徳となります。

10月3日（土）ヘブル人への手紙5章9，10節

「完全な者とされ、ご自分に従うすべての人にとって永遠の救いの源となり」（9節）

「完全な者とされ」と聞くと、少なからず驚く人がいます。つまり、キリストは不完全だったのかとか、完全ではない部分があったのかと思ってしまうからです。そうではなく、むしろ昨日見ましたように、お受けになった様々な苦しみによって従順を学ばれることで、まことの人としてのイエス様においても完全な者とされ、その完全さが証しされたということです。ですから、Hughes という新約学者は「試みられ、かつ勝利をもって忍ばれたイエスの苦難には、失敗も敗北もなく、それが完全であることを証明している」と言いました。そして、まことの神であり、まことの人であるイエス様だけが、完全な者とされたと言えるお方なのです。そして、完全な者とされたイエス様は、「永遠の救いの源となられ」ました。まさに、このイエス様だけが永遠に変わることもない救いを与えるお方なのです。そして、10節にありますように、このイエス様は「メルキゼデクの例に倣い、神によって大祭司と呼ばれた」お方なのです。

「ご自分に従うすべての人にとって永遠の救いの源となり」とありますが、ここでヘブル人への手紙の著者は、「ご自分を信じるすべての人にとって」とは言わず、「ご自分に従うすべての人にとって」と言っています。それは、すなわち、もし私たちがイエスを自分の救い主として信じるというのであれば、私たちは当然イエスに従うはずであり、そのイエス様に対する服従こそが私たちの永遠の救いを受けたことの証しだということです。ですから、私たちは口先だけで信仰と言うのではなく、イエス様への服従により、自らの信仰を証しすべきです。そして、私たちはイエス様への服従を通して従順を学び、完全な者とされていきます。もちろん完全にされたと言われるのはイエス様だけであって、私たちが生涯において完全にされることはありませんが、少しでもイエス様の完全に私たちも近づく歩みをしていくこと、これが私たちの信仰の歩みです。

10月4日（日）ヘブル人への手紙5章11節

「このメルキゼデクについて、私たちには話すことがたくさんありますが、説き明かすことは困難です。あなたがたが、聞くことに対して鈍くなっているからです。」

ここでヘブル書の著者は、これまでの話しを一旦中断するかのように、これまで自分が語ってきたことと、これからさらに話す内容について読者が理解する能力があるかどうかについて話題を変えます。もしかすると、これまで彼が語ってきたことが、あまりにも学問的であり、神

学的すぎると思ったのかもしれませんが、（注：そうは言っても、7章から再びメルキゼデクのことについて書き始めている。）その一方で、成熟したクリスチャンにはこれまでの議論は何の問題にもならないはずで、「あなたがたが、聞くことに対して鈍くなっているからです。」と、読者自身の霊的な問題を指摘しています。これは致命的な問題と言わざるを得ません。なぜなら耳が鈍っているということは、神様が何を話されても、それを聞き、理解することができないということだからです。ということは神様の真理を学ぶことはできない、神様のみこころを知り、物事を信仰的に判断したり、行動することができないということになり、そうなりますと、当然信仰的にも、さらに成長し、豊かな実を結ぶクリスチャンになることはできないということになりかねません。またそれだけにとどまらず、そのまま放置すれば、霊的に衰弱し、霊的に死んでしまう可能性もあります。本来キリスト者とされた私たちは霊の耳が神によって開かれているはずで、耳の鈍い者ではないはずなのです。しかし意識的に神のみことばを軽んじ、聞こうとしなかった結果が、このような霊の耳の鈍さを生むことになり、そしてヘブル書の著者も、あえてここで、この問題を取り上げているのです。

私たちは、神様によって霊の耳が開かれていて、本来霊的なことについて他の人より敏感であるべきですが、自分の耳が鈍いことにすら気がついていない人があるかもしれません。私たちの耳は鈍くなっていませんか。鈍くなった耳で神様のみことばを聞いているようなことがないでしょうか。もし、そうであれば神様に耳を開いてくださるよう祈り、はっきりと主の御声が聞こえ、主の真理とみこころをよく悟ることができ、それに従えるよう、祈りましょう。